

選 挙 公 報

2010年10月14日
総長選挙管理委員会
委員長 市川 正人

総長選挙実施についての申し合わせ第2号にもとづき、下記の総長候補者について、主な経歴および推薦理由を公表します。なお、総長候補者推薦委員会における総長候補者推薦に至る経緯についても参考に添付しています。

記

総長候補者 氏名 (50音順)	飯 田 健 夫
	川 口 清 史
	坂 根 政 男
	谷 口 吉 弘


総長候補者の推薦理由および主な経歴は別紙のとおり。

以上

総長選挙管理委員会 Chancellor Election Control Board

《総長候補者推薦届・推薦委員会からの推薦》
ENTRY REPORT FOR NOMINATED CHANCELLOR CANDIDATES
(Chancellor Candidate Nomination Committee)

【候補者 Candidate】

所属 Affiliation	立命館大学 総合理工学院情報理工学部	職位 Job Title	教授 学校法人立命館副総長 立命館大学副学長
フリガナ 氏名 Name	イイダ タケオ 飯田 健夫		 Signature
年齢 Age	70歳	学位 Degree	学術博士（筑波大学）
研究分野 Research Field	感性工学 人間工学 感覚生理学		

【候補者の経歴 Education and Work Experience of the candidate】

学歴	
1965年3月	茨城大学文理学部心理学科 卒業
1981年2月	学術博士（筑波大学）
職歴	
1965年4月	通商産業省工業技術院産業工芸試験所 入所
1970年10月	東京芸術大学美術学部講師 併任（1971年8月まで）
1972年7月	通商産業省工業技術院製品科学研究所（所名変更）（1992年12月まで）
1992年9月	通商産業省工業技術院製品科学研究所所長（1992年12月まで）
1993年1月	通商産業省工業技術院生命工学工業技術研究所次長（1994年3月まで）
1994年4月	立命館大学理工学部教授（2004年3月まで）
2004年4月	立命館大学情報理工学部教授（2006年3月まで）
2006年4月	立命館大学情報理工学部特命教授（2009年12月まで）
2010年1月	立命館大学総合理工学院情報理工学部教授（現在に至る）
主な学内役職歴	
1998年4月	立命館大学 BKC 文理総合インスティテュート運営委員長（2000年3月まで）
2001年4月	立命館大学 BKC リエゾンオフィス室長（2003年3月まで）
2004年4月	立命館大学情報理工学部長、学校法人立命館理事・評議員（2006年3月まで）
2010年1月	学校法人立命館副総長・立命館大学副学長、学校法人立命館理事・評議員（現在に至る）
学外（学会等）での主な役職歴	
1998年4月	バイオメカニズム学会理事
2000年4月	日本感性工学会副会長
表彰等	
1994年	「無拘束型三次元オプトメータ」により注目発明（科学技術庁）受賞
1995年	精密測定技術振興財団「高城賞」
2001年	バイオメカニズム学会論文賞
2008年	日本感性工学会「技術賞」

【推薦理由 The Reason of Recommendation】

以下の推薦理由文は、各候補を推薦した推薦委員が作成したものであり、委員会として作成したものではない。

ここに総長候補者として推薦致します。飯田健夫氏（現・副総長）について推薦理由を述べさせていただきます。次の総長へ求められる要件は、①立命憲章に盛り込まれた理念の実現、②教育研究のさらなる推進、③次期中期計画（R2020）の具体的施策と実行のリーダーとしてそのリーダーシップを発揮できる人物であります。また、総合学園・立命館として、立命館大学、立命館アジア太平洋大学、立命館附属の小学校、中学・高等学校、ならびに校友・父母を含めた全体の一体感を醸成できる人望ある人物が求められております。同時に、国内外の機関、大学との対外的な交流、交渉において、的確な判断ができ、社会環境に対する鋭敏な感覚とバランス感覚を有していることが、今後の学園を代表する総長には求められます。

飯田健夫氏は、茨城大学文理学部心理学科を卒業（1965年3月）後、通産省（現・経産省）の産業工芸試験所に入職され、主に感覚情報処理に関する研究に従事し、主に眼の調節機能の測定に取り組み、「Three-dimensional Optometer」（共著：Applied Optics）等の研究成果を発表するとともに、開発されたオプトメータを活用して、視覚疲労の測定や立体視メカニズムを解明するなど、感性工学、人間工学の分野において多くの業績をあげられてきております。特に、「無拘束型三次元オプトメータ」の開発に関して、注目発明（科学技術庁）を受賞されておられます。また製品科学研究所在職中には、研究成果を博士学位論文「奥行情報処理における焦点調節の応答調整」としてまとめられ、博士号を筑波大学から授与されるとともに、東京芸術大学美術学部講師として大学教育にも携わっておられます。研究所時代の後半には、研究所全体のマネジメントならびに省庁幹部との折衝にあたるポスト（所長を含め）に就かれ、同研究所の発展に寄与されています。

1994年に本学理工学部機械工学科に着任され、人間の感覚、運動特性を工学的に応用する人間工学、さらには製品との情緒的、精神的適合性を追究する感性工学を製品設計の中に位置づける研究』テーマのもと、学生・院生の教育・研究に邁進され、『現代生活の質的向上に向けて、複雑化、ブラックボックス化したハイテク製品を安全で使い易い快適性を付加するために、人間のハード、ソフト、ハートの特性に適したヒューマンインタフェースの設計、VR空間における視と触情報の融合、ハイテク機器が与える身体的、精神的負荷の解明に取り組まれた。研究室の卒業生、修士ならびに博士課程の修了生の多くは、これらに関する分野、メーカーに就職し活躍しています。

2004年4月からは新設された情報理工学部に移籍され、学部長・理事として学部の立ち上げから、新しい学部教育、組織運営にも大きく貢献されました。また、本学着任後も多くの研究業績を積み上げられ、精密測定技術振興財団「高城賞」（1995）、バイオメカニズム学会論文賞（2001）、日本感性工学会「技術賞」（2008）などを受賞されています。

2007年4月から立命館大学特命教授として、主に立命館守山を含めた「スーパーサイエンスハイスクール」のサポート（理工学教育の強化）に邁進され、付属校での理科系教育の強化、高度化に大きな力を発揮されてきました。2008年4月からは接続教育支援センター長としてその役割をさらに強められ、高校と大学との教学連携プログラムの企画、接続教育の推進に大きく寄与されておられます。2010年1月からは立命館副総長として勤務され、現在に至っております。

学内役職の経歴の中で、2001年4月から2年間、BKCリエゾンオフィス室長として、国内外の企業、自治体との研究連携、大型プロジェクトの獲得に大きく寄与されておられ、この間の立命館大学の産官学連携の発展に大きく貢献されておられます。同時に、学外の研究助成、大型プロジェクトの評価委員、審査委員としても活躍され、国家レベルでのプロジェクト研究の方向性、適合性を審査することができる力量をお持ちであることは実証済みであり、本学園の研究高度化においても必要不可欠の人物といえます。

以上のように、飯田健夫氏のこれまでの教育・研究、ならびに歴任されております国の研究所長、本学でのリエゾン室長、学部長、副総長等のマネジメント能力、さらには付属校との接続教育支援センター長など、最初に述べたような総長としての条件をほとんど満たす先生であることを強く確信し、ここに総長候補者として推薦致します。

総長選挙管理委員会 Chancellor Election Control Board

《総長候補者推薦届・推薦委員会からの推薦》
ENTRY REPORT FOR NOMINATED CHANCELLOR CANDIDATES
(Chancellor Candidate Nomination Committee)

【候補者 Candidate】

所属 Affiliation	立命館大学 政策科学部	職位 Job Title	教授 学校法人立命館 総長 立命館大学 学長
フリガナ 氏名 Name	カワグチ 川口	キヨフミ 清史	川口清史 Signature
年齢 Age	65歳	学位 Degree	博士（経済学）、京都大学
研究分野 Research Field	経済学（経済・社会システム、経済事情および政策学）		

【候補者の経歴 Education and Work Experience of the candidate】

学歴	
1969年3月	京都大学経済学部経済学科 卒業
1969年4月	京都大学大学院経済学研究科修士課程 入学
1971年3月	京都大学大学院経済学研究科修士課程 修了
1971年4月	京都大学大学院経済学研究科博士課程 入学
1974年3月	京都大学大学院経済学研究科博士課程 単位取得退学
1995年	博士（経済学）
職歴	
1974年4月	日本学術振興会奨励研究員（1976年3月まで）
1976年4月	立命館大学産業社会学部 助教授（1987年3月まで）
1987年4月	立命館大学産業社会学部 教授（1994年3月まで）
1994年4月	立命館大学政策科学部 教授（現在に至る）
学内での主な役職歴	
1988年10月	立命館大学調査・広報室長（後の調査企画室長）（1991年3月まで）
1991年9月	立命館大学政策科学部設置委員会事務局長（1992年9月まで）
2000年4月	立命館大学教学部長（2003年3月まで）
2004年4月	立命館大学政策科学部長、学校法人立命館理事・評議員（2006年12月まで）
2007年1月	学校法人立命館総長・立命館大学学長、学校法人立命館理事・評議員（現在に至る）
学外（学会等）での主な役職歴	
	国際公共経済学会理事
	表彰等

【推薦理由 The Reason of Recommendation】

以下の推薦理由文は、各候補を推薦した推薦委員が作成したものであり、委員会として作成したものではない。

総長のような役職は、学園の内であっても外に於いても、一期ではなく、二期続けてこそ、その力が発揮されるものである。川口清史氏の一期目の成果をもとに、そのもてる力量と個性を発揮するのは次の4年間である。もう一期続けて欲しいと願い推薦する次第である。

川口清史氏の専門分野は経済学で、研究領域としては、経済・社会システム、社会経済学、非営利組織論である。京都大学で博士（経済学）の学位を取得し、著作・論文も堅実に発表され、当該分野における学問的な評価も定着しており、研究者としても評価できる。

川口清史氏は、総長としてのこの4年間、なによりも立命館憲章を実践する立場から、学内の諸課題を解決するための努力を確実に積み上げてきた。いわゆる信頼回復の取り組みの先頭に立ち、学園の管理運営の改革におけるリーダーシップを発揮してきた。特別転籍問題を契機とした学園の管理運営の改善、総長選挙規程の制定などである。現在の難しい時期の舵取り役としてふさわしい人材である。

その成果をもとにして、現在、学園あげでの取り組みとなっている2020年までを見通した新しい中期計画の策定に向けた取り組みの先頭に立っている。私立総合学園としての盤石な発展を期するためのキャンパス創造の提起、真の一貫教育の実現、ラーニングコモンズとしての図書館の機能強化、基礎から先端分野にわたるバランスのとれた研究力の強化、創造性をうみだすゆとりでの創出、ST比（教員一人当たり学生数）改善などの教職員体制の充実などを柱とした中期計画の柱を練り上げ、旺盛な議論をリードしてきた。

また、国内外でグローバル人材が求められている今日、なによりも国際的評価に耐えうる「教育の質保証」が重要となっている。そのことはAPUがまさにつくり上げようとしていることである。APUのこうした取り組みを支援することは学園にとって重要な課題といえる。立命館大学における国際化拠点整備事業（グローバル30）を含めた国際性の強化はAPUの成果に学びながらその成果を学園全体のものにしていく過程でもある。その一環として川口清史氏は総長として世界各地を訪問してきた。韓国全土の大学総長・理事長の会合において立命館の改革の取り組みの講演はとくに好評を博した。くわえて、世界各地で開催された学長会議（日中学長会議や日英学長会議など多数）で精力的にプレゼンテーションをおこない、とりわけ日中韓の若者が相互に大学で単位をとり国際人を養成するための「アジア版エラスムス計画」について提言するなど国際教育政策の力量も形成しつつある。こうした国際性が高く評価され、外務省からの推薦もあり、現在、「日韓文化交流会議」の日本側座長を務めている。

さらに川口清史氏は、就任以来、社会に貢献し世界を舞台に力を発揮する子どもたちを育てる一貫教育の理念の確立とその具体化にむけて先導的役割を発揮してきた。2006年開設の立命館小学校の完成、北海道における立命館慶祥中高の将来構想確立、地方自治体と緊密に連携することで新たな私学の方向性を示した立命館守山中高の開校、インターナショナル・バカロレアを軸とした全国有数の国際化教育を推進する立命館宇治中高、そして長岡京移転を契機にさらなる教育の高度化を目指す立命館中高の充実などの成果を導いてきた。

川口清史氏は、35年の長きにわたり、立命館大学の教員として教育と研究に携わりながら、学生部次長、調査・広報室長（調査企画室長）、教学部長という全学役職を経験され、政策科学部設置委員会事務局長として学部開設に尽力され、2度にわたるUBC（ブリティッシュ・コロンビア大学、カナダ）とのジョイント・プログラム教務主任を務めるなど、立命館の発展に貢献してきた。その経験をもとにした学校法人立命館総長・立命館大学長としての4年間が経過した。総長を務められてからも、生命科学部・薬学部およびスポーツ健康科学部の新設に貢献した。

川口清史氏は、社会貢献にも努力している。生協のシンクタンクとしての「くらしと協同の研究所」理事長、国際公共経済学会理事、財団法人大学基準協会理事・評議員、社団法人日本私立大学連盟常務理事、公益財団法人大学コンソーシアム京都副理事長などである。

こうした教育、研究、行政の各分野において、その名声は高く、広く社会に貢献され、学外に対する影響力は絶大である。こうした研究、教育、行政の経験をもとにして2020年までの立命館の基礎をつくることになる次の4年間を確実なものにすることが期待できる。川口清史氏の人物・人柄は誠実・実直で、何よりも立命館を愛している。また、スポーツ強化に対する想いは強く、大のスポーツ好きで公務の合間をぬって学生の応援のために観戦している。

以上の諸点より川口清史氏を次期立命館の総長として強く推薦する次第である。

《総長候補者推薦届・推薦委員会からの推薦》

ENTRY REPORT FOR NOMINATED CHANCELLOR CANDIDATES
(Chancellor Candidate Nomination Committee)

【候補者 Candidate】

所属 Affiliation	立命館大学 総合理工学院理工学部	職位 Job Title	教授 総合理工学院副学院長 理工学部長
フリガナ 氏名 Name	サカネ マサオ 坂根 政男		坂根 政男 Signature
年齢 Age	62歳	学位 Degree	工学博士（立命館大学）
研究分野 Research Field	材料力学（多軸応力下における高温機器の信頼性評価法）		

【候補者の経歴 Education and Work Experience of the candidate】

学歴	
1972年3月	立命館大学理工学部機械工学科 卒業
1972年4月	立命館大学大学院理工学研究科機械工学専攻修士課程 入学
1974年3月	立命館大学大学院理工学研究科機械工学専攻修士課程 修了
1974年4月	立命館大学大学院理工学研究科機械工学専攻博士課程 入学
1976年9月	立命館大学大学院理工学研究科機械工学専攻博士課程 中退
1979年3月	工学博士（立命館大学）
職歴	
1976年10月	立命館大学理工学部 助手（1990年3月まで）
1990年4月	立命館大学理工学部 助教授（1994年3月まで）
1994年4月	立命館大学理工学部 教授（現在に至る）
学内での主な役職歴	
2001年4月	立命館大学国際教育・研究推進副機構長（BKC担当）（2003年3月まで）
2007年4月	立命館大学理工学部長、学校法人立命館理事・評議員（現在に至る）
2008年4月	立命館大学総合理工学院副学院長（2009年3月まで）
2009年4月	立命館大学総合理工学院長（2010年3月まで）
2010年4月	立命館大学総合理工学院副学院長（現在に至る）
学外（学会等）での主な役職歴	
1996年5月	日本材料学会理事、同高温強度部門委員会幹事顧問（1998年5月まで）
2003年5月	日本材料学会理事、同学会編集委員会委員長（2005年5月まで）
表彰等	
2003年3月	日本機械学会フェロー

【推薦理由 The Reason of Recommendation】

以下の推薦理由文は、各候補を推薦した推薦委員が作成したものであり、委員会として作成したものではない。

今次の総長選挙は、新しい総長選挙制度の下で、学生・教職員そして学園関係者相互の信頼を回復し、立命館学園をひとつにまとめ上げていく必要があります。今、学園は、学園ビジョンの策定と新しい中期計画の練り上げの議論を進めていますが、新キャンパス展開をはじめ学園の進むべき方向について、なお、意見の相違を抱えていることも事実です。

坂根政男氏は、その現場に根ざしたリーダーシップと、卓越したバランス感覚によって学園をひとつにまとめ、全学合意で策定される新中期計画に基づいて、学園の新しい発展の道を切り開いていくことのできる候補者です。合わせて、坂根政男氏は、平和と民主主義の教学理念と立命館憲章の精神に新しい息吹を吹き込むことのできる信念の持ち主であり、学生を大切に、現場の声に耳を傾けることのできる人情味のある人物です。さらに、データと実態に基づいて確実な計画を練り上げていく合理的な政策力を有し、それを実現できる実行力の持ち主でもあります。

坂根政男氏は、現在の理工学部長として、学生の基礎学力問題など教育現場の実態把握を、徹底した議論に基づいて周到に検討し、理工学部および理工学研究科の教育研究の将来構想を明確にしなが、2012年度の抜本改革を推進されています。これらの教学改革は、その内容はもとより検討の手法を含めて、理工学部教員のみならず職員からも高い評価を得ています。この4年間、同氏のリーダーシップの発揮により、理工学部では、学科・学系での議論が徹底的に組織され、その結果、所属の教員・職員は多くの困難を克服しながら、教育研究に取り組む意欲と改革の決断を生み出すことにつながりました。坂根政男氏は、そうした理工学部の教学改革の先頭に立って、11の学科での民主的で責任ある議論を尊重し、高い到達点を作り上げています。その手腕と、現場の声に耳を傾ける真摯な姿勢は、理工学部の教員・職員の厚い信頼と尊敬として現れており、その資質は、現在の学園において、総長として全学からの信頼と期待を担うに相応しい統率力の源泉になると確信します。

坂根政男氏は、立命館大学出身であり、今日まで一貫して立命館大学において教育研究に携わっています。その中でも、特に長い助手歴があり、この体験が現場での下積みの苦労を熟知する貴重な経験となり、現場重視の資質の形成に寄与しています。また、助手時代からじっくりと腰を落ち着けて教育・研究に取り組み、今日の確かな教育観、研究力につながっています。そして、恩師である大南教授の影響を受け、研究の国際化の先頭を切って、1980年には米国 Northwestern 大学に留学し、1999年には米国 Illinois 大学で在外研究員として研鑽を積み重ねました。こうして得た経験は、その後の国際教育・研究機構の副機構長としての活躍にも繋がっています。同氏は、今日の学園ならびに理工学部の国際化をリードする下地を作った人物の一人であり、現在においても、国際化を強力に推進し、大学院での積極的な留学生の受入れや、理工学研究科の GP（文部科学省選定のプログラム）「国際力を備えた技術系大学院の育成（理工国際プログラム）」（2007～2009年度まで）等の成果として現れています。

研究者としての坂根政男氏は、材料力学分野で優れた研究業績を数多く重ねています。その実績は、221件の論文、18件の著書、その他多数の研究発表、知的所有権として結実しており、また、30を超える学会役職を通して学会活動にも大きく貢献しています。なお、研究指導面では、修士を多数指導するとともに、博士に関してもこの10年間で10名を輩出する等、後進の指導力にも定評があります。さらに今年度は、理工学研究科において採択された「イノベーション創出若手研究人材養成プログラム」（科学技術振興調整費）を主導するなど、博士のキャリア育成にも尽力しています。

坂根政男氏は、一貫教育にも高い関心を持たれています。具体的には、附属校からの入学者の数学・物理の基礎学力向上をめざした入学前教育の取り組みや、附属校生を対象としたゼミナール形式の新たな正課科目の新設を進めるなど、附属校との協力関係を前提とした施策を重視しています。

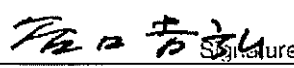
このように、坂根政男氏は様々な改革議論において、現場の持つ潜在的な力量と実現可能性を考慮しながら、着実に改革を進めようとするスタイルを貫かれています。現在の常任理事会においても、理事として、そのスタイルを貫きながら、全学的な視点で常に積極的に発言し、学園創造に寄与されています。今こそ、同氏には、総長として、教学の最高責任者として、現場を重視した改革が推進できる役割が強く期待されているのです。

以上の理由により、坂根政男氏を最もふさわしい総長候補者と考え、推薦いたします。

総長選挙管理委員会 Chancellor Election Control Board

《総長候補者推薦届・推薦委員会からの推薦》
 ENTRY REPORT FOR NOMINATED CHANCELLOR CANDIDATES
 (Chancellor Candidate Nomination Committee)

【候補者 Candidate】

所属 Affiliation	立命館大学 総合理工学院生命科学部	職位 Job Title	特別招聘教授 総合理工学院長 生命科学部長
フリガナ 氏名 Name	タニグチ ヨシヒロ 谷口 吉弘		
年齢 Age	68歳	学位 Degree	工学博士（立命館大学）
研究分野 Research Field	物理化学、高圧化学、生物物理学		

【候補者の経歴 Education and Work Experience of the candidate】

学歴	
1965年3月	立命館大学理工学部応用化学科 卒業
1965年4月	立命館大学大学院理工学研究科応用化学専攻修士課程 入学
1967年3月	立命館大学大学院理工学研究科応用化学専攻修士課程 修了
1967年4月	立命館大学大学院理工学研究科応用化学専攻博士課程 入学
1970年3月	立命館大学大学院理工学研究科応用化学専攻博士課程 修了
1971年3月	工学博士（立命館大学）
職歴	
1970年4月	立命館大学理工学部 助手（1979年3月まで）
1979年4月	立命館大学理工学部 助教授（1985年3月まで）
1985年4月	立命館大学理工学部 教授（2007年3月まで）
2007年4月	立命館大学特別招聘教授（現在に至る）
学内での主な役職歴	
1992年4月	立命館大学理工学研究所長（1994年3月まで）
1998年4月	立命館大学理工学部長、学校法人立命館理事・評議員（2001年3月まで）
2003年4月	立命館大学総合情報センター長（2006年3月まで）
2008年4月	立命館大学生命科学部長、学校法人立命館理事・評議員（現在に至る）
2008年4月	立命館大学総合理工学院副院長（2010年3月まで）
2010年4月	立命館大学総合理工学院長（現在に至る）
学外（学会等）での主な役職歴	
1991年	日本材料学会高圧力部門委員長・理事（1993年まで）
1994年	文部科学省外国人留学生の選考等に関する調査・研究協力者会議委員（現在に至る）
2001年	日本材料学会副会長（2003年まで）
2002年	ニューヨーク科学アカデミー会員（現在に至る）
2001年	滋賀県立高等学校将来構想懇談会委員（2002年まで）
2001年	文科省外国人留学生の選考等に関する調査・研究協力者会議専門委員（現在に至る）
2004年	大学評価・学位授与機構全学テーマ別評価副委員長
2005年	日本国際教育大学連合（JUCTe）常務理事（現在に至る）
表彰等	
1975年	松永記念科学振興財団奨励賞

【推薦理由 The Reason of Recommendation】

以下の推薦理由文は、各候補を推薦した推薦委員が作成したものであり、委員会として作成したものではない。

谷口吉弘氏は、以下のような一連の理由から、立命館学園の今後の新たな発展の先頭に立つ総長候補者としてきわめてふさわしい人物であると考えられる。

経歴に見られる通り、谷口吉弘氏は、立命館大学および立命館大学大学院で学ばれ、1971年に博士学位論文「高圧下における高分子の秩序—無秩序転移に関する研究」により、工学博士（立命館大学）の学位を取得された。そして、日本高圧力学会、日本材料学会をはじめとする所属学会を舞台に旺盛な研究活動を進められ、その研究業績に基づいて、それら諸学会や国内外の諸研究機関において指導的役割を今日に至るまで果たされている。立命館学園の総長は、主要な任務の1つとして、学園が有する2大学による学術研究の一層の強化と国内外の学術研究におけるその地位の一層の向上を牽引する役割を有しているが、谷口吉弘氏の研究業績と学界における実績は、そのような総長としての任務を遂行するにふさわしいものと言えよう。

谷口吉弘氏は、教育者としても、1970年に立命館大学理工学部助手に就任されて以来、同助教授、教授、そして立命館大学特別招聘教授として、豊富な教育活動の経験を積み重ねてこられている。高等教育機関としての立命館大学において、同氏が、学びの主人公である学士課程学生や大学院学生と日々接しつつ、情熱をもって長年、学生の教育に当たってこられたこと、そしてその経験を通じて、学生の実情やニーズを的確に理解し、なによりも学生の成長を優先する姿勢を堅持してこられたことは、学園の教学を統括する総長候補者にきわめてふさわしいものである。同氏は、このように勤務校である立命館大学における教育実践を担われる一方で、多方面の社会的活動の一環として、国内他大学の教育等の評価、さらには国内および国際的な高等教育の推進に関わる一連の重要な役職を遂行されている。これらを通じて、同氏は、大学における教育活動とそこで解決を求められる諸問題について、つねに全国的、国際的視野から考え、その解決の方向性を示してこられた。このように、一方では、自らの勤務校における教育現場の日々の具体的な教育課題に正面から取り組みつつ、他方では、全国的、国際的視野からそれらの教育課題を捉え、その解決に向けて行動する、という同氏の実績は、立命館学園の両大学における教育をさらに発展させる取り組みの新たなリーダーとして、きわめてふさわしいものと言えよう。

同時に谷口吉弘氏は、高等教育だけでなく、中等教育においても社会的に様々な指導的役割を果たしてこられた。この経験と実績およびそれを通じて培われた一貫教育に対する同氏の理解と洞察は、立命館学園の各附属校を通じた初等・中等教育を一貫教育としてさらに発展させていく上で、きわめて重要な役割を果たすであろう。

大学・学園の学内行政の面でも、谷口吉弘氏はこれまでにきわめて重要な貢献をなされている。学内行政におけるこれまでの同氏の最も重要な貢献の1つは、立命館大学において最も大きな規模をもつ教学組織である理工学部を代表し統括する学部長理事として、学部の教学と大学・学園の管理運営・経営の結節点を担う重責を立派に果たされたことであろう。そしてその後、生命科学部の新たな設立に指導的な役割を果たされ、同学部の設立後は、その学部長理事としての重責を現在に至るまで担っておられるだけでなく、その職責を通じて、総合理工学院副院長、さらには同学院長としても、指導的役割を果たしておられる。同氏は、上記以外にも、理工学研究所長、総合情報センター長などの全学役職を歴任されているが、いずれの場合においても、当該組織構成員の多様な意見に広く耳を傾けつつ、立命館大学の構成機関として目指すべき方向に関する自己の信念をもって組織をリードしてこられた。同氏のこの姿勢は、近年、本学園にとって焦眉の課題となった社会的諸規範へのコンプライアンス、そして学園全体のガバナンスに関わる問題を着実に解決し、学園構成員間に新たな次元のコンセンサスと信頼関係を打ち立てて、教育・研究機関としての更なる発展を図る事業に大きく貢献するであろう。

最後に、激動する世界にあって、日本の経済・政治・社会が様々な面で深刻な問題を抱えていることは明瞭であるが、高等教育をはじめとする日本の教育も今日、世界的な観点から大きな変革を迫られていると言わねばならない。谷口吉弘氏は、その経歴を通じて海外の高等教育関係者、外国人留学生、そして日本国内にあって広義の国際教育に関わる関係者との間に多様な接点を形成され、世界的な観点から、鮮明な危機意識を持って日本の教育、とりわけ高等教育のあり方を見つめ、折に触れてその発展の方向性を指し示してこられた。これこそまさに、これからの時代の本学園の総長候補者に求められるべき資質であろう。

総長候補者推薦に至る経緯について

2010年10月1日
総長候補者推薦委員会
委員長 服部 健二

学校法人立命館総長選挙規程第19条第3項の規定に基づき、下記の通り、総長候補者推薦委員会における総長候補者の推薦に至る経緯について公表する。

記

- (1) 今次の総長選挙は、前回の総長選任過程を含めたここ数年の学園運営をめぐる様々な事態への反省を踏まえ、全学での丁寧な議論を経て制定された総長選挙規程に基づく初めての総長選挙である。したがって、総長選挙の一つ一つの過程が、学園における信頼と一体感の回復の過程となるよう丁寧な議論と民主的な手続きを通じて実施されることが何よりも重要である。本委員会は、こうした認識のもとで、総長候補者を推薦するという重要な役割を果たすべく議論を行ってきた。
- (2) 本委員会は学園内の各区分から選挙により選出された30名の委員により構成され、7月2日の選挙管理委員会委員長による委員の公示をもって正式に発足した。
- (3) 7月16日に開催した第1回委員会では、委員の互選により、委員長に服部健二委員（RU 文学部選出）、副委員長に吉田美喜夫委員（RU 法学部選出）を選出した。引き続き、総長候補者の推薦原則と推薦手続を審議し、決定した。この推薦原則および推薦手続に基づき、夏休み明けに開催する次回委員会で候補者推薦の具体的な議論を行うこととした。なお、総長選挙規程第18条第7項の規定に基づき、推薦原則および推薦手続は、7月28日付で公示している。
- (4) 9月24日に開催した第2回委員会では、総長像の議論を行ったうえで、候補者の推薦議論の進め方を確認し、具体的な候補者についての議論を行った。総長像として出された主な意見は、次の通りであった。なお、これらの総長像は、委員会での総長候補者推薦の議論に当たって考慮されたものであり、委員会として確認したものではなく、また総長選挙における選挙人の投票の基準等を示したものでもない。

- 1) 立命館憲章と教学理念を教学の中で実践している人物であること。
- 2) 現在議論されている R2020 実践の最初の 4 年間で示すことができる人物であること。
- 3) 教職員に信頼され、現場を大切にリーダーシップがあり、総合学園として APU や附属校にも心を割いて束ねるなど学園としての一体感をつくりだす出す軸になる人物であること。
- 4) 学生の成長を第一の価値観とする人物であること。
- 5) 立命館の取組を社会に発信し、社会的信頼を高めることができる人物であること。
- 6) 教育者としての熱い思いがある人物であること。
- 7) バランス感覚を持ち、判断がぶれない人物であること。
- 8) この間の学園運営をめぐる様々な事態を踏まえ、学園運営のあり方を変えるリーダーに相応しい人物であること。
- 9) 教学を優先し、誠実な人物であること。
- 10) 研究実績等に裏付けられた学識を持つ人物であること。
- 11) 全学的な役職を経験するなど学園運営の実績のある人物であること。
- 12) APU、附属校を含めた全学園のリーダーとして相応しい人物であること。
- 13) 国際社会への発信ができる人物であること。
- 14) 立命館の取り組みが学園外から見えるようにできるリーダーであること。
- 15) 学園の行政の経験や手腕以上に、人望と信頼があり、学園統合のシンボルとなる人物であること。
- 16) 現場における苦勞を理解できる人物であること。
- 17) 対外的な代表性や国際性があり、自分の哲学を語る発信力のある人物であること。
- 18) 学生との対話を重視し、それを踏まえてビジョンを持って決断ができる人物であること。
- 19) 教職員と強調してビジョンを実現していくことができる人物であること。
- 20) 立命館の歴史を語り、それを踏まえた学園運営ができる人物であること。
- 21) 日本において国際的な人材を育てることができる人物であること。
- 22) 規程第 6 条の内容、とくに学識に優れた者という資格を示す上で、また大学の国際化を考慮して、博士学位を持った人物であること。
- 23) 健康であり、かつ健康を維持していく人物であること。

以上のような総長像の議論を受けて、具体的な候補者の推薦の議論を行うこととした。それに先立ち、候補者の推薦の議論の進め方について意見交換を行った。その結果、慎重な審議を行うため、本日の委員会で結論は持たず次回委員会で委員会としての総長候補者の推薦を決定すること、多数の推薦が出された場合

は本日の委員会で10名程度に絞り込むこと、本日の候補者の絞り込みおよび次回委員会での委員会として推薦する総長候補者の決定は、無記名による3名以内の候補者に対する投票により行うこと、を確認した。

その上で、7名の候補者が各委員より理由を付して推薦された。推薦された者の内訳は、立命館大学教授6名(衣笠キャンパスの学部2名、BKCの学部4名)、立命館アジア太平洋大学教授1名であり、理事経験者は7名であった。

推薦された人数が10名程度以下であったため、本日の委員会での絞り込みは行わず、推薦された7名全員を次回委員会での議論の対象とすることにした。委員からの候補者の推薦は、本日の委員会のみとし、次回の委員会で追加の推薦は行わないこととした。また、各推薦者について、推薦した委員より、次回委員会において、総長候補者推薦届の様式を踏まえて推薦理由を文書で提出し、議論することとした。

- (5) 10月1日に開催された第3回委員会では、前回委員会で推薦された7名を対象に、委員会として推薦する総長候補者を確定する議論を行った。議論に当たっては、規程および第1回委員会で確認した原則を踏まえるとともに、前回委員会で出された総長像を考慮することとした。

各委員より、前回推薦された候補者の推薦理由等の説明の上、意見交換を行った。その後、総長候補者を決定する方法について、推薦されている候補者の中から3名以内に対して投票を行うこと、4名以上への投票は無効とすること、投票に順位はつけないこと、委員会として推薦する候補者を何名にするかは投票結果を踏まえて確定すること、を確認した。その上で、投票を行い、その結果を踏まえて、意見交換を行い、本委員会として推薦する総長候補者を4名とすることとした。

以上を踏まえて、本委員会として下記の4名を総長候補者として決定し、選挙管理委員会委員長に届出を行うこととした。

なお、下記の総長候補者は五十音順である。また、推薦理由文は、各候補を推薦した推薦委員が作成したものであり、委員会として作成したものではない。

飯田健夫氏(立命館大学情報理工学部教授)

川口清史氏(立命館大学政策科学部教授)

坂根政男氏(立命館大学理工学部教授)

谷口吉弘氏(立命館大学生命科学部教授)

以上